

花祭り研究と上演

—— 折口信夫を中心として ——

小川 直之

はじめに

愛知県東部の奥三河に伝えられている「花祭り」は、現在は日本を代表する、いわゆる「民俗芸能」として知られ、国の重要無形民俗文化財にも指定されている。今回は、この芸能が研究者によってどのように取り上げられ、学界などに知られるようになったのかについて、折口信夫を中心にして見ておきたい。

後述するように折口信夫が奥三河の地で初めて「花祭り」を見るのは1926（大正15）年1月で、それは早川孝太郎に案内されてであった。その後は毎年のように「花祭り」を訪れるようになるが、折口の関心は「花祭り」だけではなく、この祭りの伝承地域の北に位置する長野県下伊那郡の新野の雪祭り、天龍村坂部の冬祭り、水窪町西浦の田楽など、三信遠国境地帯に伝承されている芸能全般であった。中でも新野の雪祭りには、「花祭り」同様、足繁く通い、これらの芸能調査をもとにいくつもの論文やエッセイを執筆している。日本の文化原理を説く折口理論のなかでは、「翁」や「もどき」論の根底に「花祭り」や「雪祭り」があり、また「まれびと」論もこれらの芸能をもとに進展させている。

なお、「花祭り」が国の重要無形民俗文化財として指定されたのは、1976（昭和51）年5月4日で、北設楽花祭保存会、古戸花祭保存会、下粟代花祭保存会、小林花祭保存会、中設楽花祭保存会、月花祭保存会、布川花祭保存会、足込花祭保存会、御園花祭保存会、東蘭目花祭保存会、河内花祭保存会、中在家花祭保存会、山内花祭保存会、間黒花祭保存会、坂宇場花祭保存会、上黒川花祭保存会、下黒川花祭保存会、津具花祭保存会の「花祭り」が指定対象となっているが、現在ではその継承が困難になっているところもある。アジア祭祀芸能の比較研究においては、その基層に存在する東アジア的普遍性ととも、祭祀芸能の継承あるいは断絶といった現実問題や文化財指定という、地域文化の国家化にとまなう芸能の再定義など、さまざまな現代的問題も存在する。

折口信夫と花祭り

折口信夫は、「同じ地方を度々見に出かけるといつた仕方、いはば、これが私の旅の方法と言へば、さう言へる形を取つて来ました」（「旅と短歌」）と言い、現に同じ地方への民俗探訪を繰り返している。折口は1921（大正10）年から1923（大正13）年の間に沖縄に2回、壱岐にも2回の長期の民俗探訪を行い、さらにこの後には花祭りや雪祭りが伝えられている三信遠国境地帯への探訪を繰り返すのである。この地方への探訪を年譜的に確認していくと、その最初は1920（大正9）年7月17日から26日にかけての、松本から美濃大井に入り、そこから岩村、浪合、新野、坂部、山住、杉峰、京丸を経て堀之内、静岡への旅であった。

これは木地屋などの山間の民間伝承を探訪して歩いた旅で、この時に新野を訪ねたことで雪祭りや奥三河の花祭りの存在を知るのである。「信州探訪手帖」（全集35）には、19日

には盆踊りのことを聞き、20日には「中藤増蔵」から「お祭りの事を聞く」とある。さらに帰京後の10月頃に書いたと考えられる新野の仲藤増蔵への未投函書簡には「若し参る様ならば、写真機持参仕り、舞人などの風姿永遠に残し置き存じ候ことに候。さやうのせつは、何分の御応援ひたすら希ひ置き候」（全集34、96頁）と記している。仲藤増蔵から「お祭りの事」を聞き、手紙では写真機を持って行き、「舞人などの風姿永遠に残し置き存じ候」と言っていることから、この祭りが所謂「雪祭り」のことであると判断できる。

新野の後藤兵衛は「雪祭りのあゆみ」（中村浩・三隅治雄編『雪祭り』東京堂、1969年）で、自分が東京に遊学中の1925（大正14）年10月頃に羽沢の折口宅を訪ね、新野の話や伊豆神社の祭りの話などをしたところ、翌年正月10日には新野を案内してくれと頼まれ、1926（大正15）年正月に折口と早川孝太郎を雪祭りに案内したと記している。

1920（大正9）年7月の信州旅行から1926（大正15年）正月までには6年近い歳月が流れているが、折口はこの間の沖繩、壱岐採訪をもとに研究を飛躍的に進展させている。その流れのなかで後藤兵衛からの話などで新野の祭り採訪が決意されたと推測できよう。折口と早川の交流が、これ以前の何時始まっているのかは不明だが、早川はこの旅のことを「折口さんと採訪旅行」の中で次のように記している。

私が折口さんのお伴をして、採訪旅行を共にしたのは大正十五年即ち昭和元年の一月で信州新野の雪祭りであった。この旅行なども今思うと極端な自己虐待であった。夜新宿を立て、辰野に着いたのが朝の六時、駅前の宿で朝食をして、そのまま飯田に出た。バスで十四里の道を揺られて、終点の大下条村に着いたのが午後四時、雪が少し降って居た。そこから新野へ三里の道の半分は真暗い中を歩いた。翌朝は三時に起されて伊豆神社の拜殿に座った。夜が明ける迄の数時間、ほんに身も魂も凍る思いであった。行事が一渡り終わった時、町に出て最先きに肌に着ける物を探した。私は毛糸のセーター、折口さんは真綿を買って背中に着たものであった。

日程がよいというので、翌日は峠を越して三河の山内の花祭りを見学、群集に揉まれて、煤と埃の中に一夜ほとんど眠らなかつた。一旦新野に引返して雪祭りに会い、翌日は七日ぶりに三河を通って帰ることにしたが、その道も最も困難なコースを選んだ。出来れば花祭りの人々に遇って、少しでも話を聴こうと思ったのだ。

四日程前に通った路を、牧の島という部落へ出て、花祭りのあった瀬戸という二軒家から、宝の部落を過ぎると次が目ざす山内である。その日も山一つ隔てただけであるが、三河は明るい陽が照って春のけざしを思わせた。

この時の新野での雪祭り見学については、伊東栄市の「神事覚書」をもとに三隅治雄が行程を明らかにしている（「折口信夫・雪祭採訪のあとさき—まれびとの旅—」『國學院雑誌』94巻11号、1993年11月）。これによれば1月11日は早曉から雪祭り見学と一の宮（諏訪神社）で面の書写と撮影、12日には三河牧島村山内に行き、瀬戸での花祭り見学を徹夜でして13日に新野に戻り、14・15日は雪祭り見学と撮影をしている。そして早川の書いているように16日には4日前（12日）に通った路を戻って山内に入ったが、花祭りのことを聴くために訪ねた人は留守で、案内人を頼んで浅草（豊根村三沢の浅草）まで行き、煙草屋を兼ねた宿に泊まり、翌日、黒川から五里の路を御園峠越えて本郷（東栄町）に出て、折口は昼食後にバスに乗るのである。早川が言うように自虐的ともいえる強行軍の旅であ

る。

これが初めての雪祭り、花祭りであるが、三信遠国境地域への旅は、1926（大正15）年も含め次頁の表1のようになる。この一覧表には渋沢敬三の花祭り見学なども含めた。

三信遠国境地域への旅譜を『折口信夫全集』36の「年譜」などから作成するとこのようになる。1926（大正15）年1月に早川孝太郎と一緒に新野の雪祭り・山内の花祭りを訪ねてから、1933（昭和8）年まで取り憑かれたように出かけているのがわかる。しかも1928（昭和3）年には山内の花祭り、1930（昭和5）年には足込の花祭り、西浦の田楽、新野の雪祭りを東京の國學院大學に呼んで実演を行ってもらっている。

早川孝太郎によって前編・後編あわせて1500頁近くにも及ぶ『花祭』が出版されるのは1930（昭和5）年4月で、早川はその「後記」に、「花祭り一を中心にして、天龍川奥地に残存した各種の祭りの採訪を始めてから、うかうかとする内もう七年経つてしまつた」と記している。これからすれば早川は、折口よりも早く1924（大正13）年から花祭り調査を進めていて、花祭りの調査は早川が何歩か先んじていたのである。

このことに対して折口は、1929（昭和4）年8月刊『民俗学』第1巻第2号の「寄合咄」欄に寄せた「三河の山村」（全集21、286頁）という短文で次のように言っている。

三河の山村の雪景色には他所には見られない特色がある様に思はれます。三河を歩いて居りまして一番心をひかれるのは雪景色、殊に春のハダレの様子には何とも云はれないものがあります。こんなことを話し出しますと何だかセンチメンタルな心がおこつて来ますが、一體今迄の民族学にはこのセンチメンタルが多分に這入つて居りました。我々はそれを卒業しようとして心掛けて来たのですが、今夜がその民族との別れでありますから、もう一遍だけそのセンチメンタルを使はさせていただきます。（中略）

私が、かうしたハダレの時に三河を歩いたのも、又三河の花祭を知つたのも、皆早川さんの手引で御座りました。その御陰で漸く考へに一寸見当が立つやうに成りました。近いうちに三河の陰鬱な舞の本が早川さんによつて出ますが、さうしたものを味ふ予備の知識を作るためにも此の絵は大切なものと成ると思ひます。三河を歩いたのは早川さんが第一で怪しまれる程歩き廻つて居られます。その次には私が歩いて居ります。

これは早川孝太郎が三河の山村の、春の雪のはだれの様子を描いた「雪の家」と題した絵がH氏賞を受賞したことを記しておくとして書いたエッセイである。苦い思い出をもつ雑誌『民族』が1929（昭和4）年3月の4巻3号で休刊となり、折口は新たに民俗学会を組織して『民俗学』を刊行し始めた時期で、ここで折口は、『民族』の民族学にはセンチメンタルが多分に入っていて、これを卒業しようとして心掛けてきたとか、近刊の早川の『花祭』を「三河の陰鬱な舞の本」というなど、単純には理解できない表現をした上で、「三河の花祭を知つたのも、皆早川さんの手引で御座りました。その御陰で漸く考へに一寸見当が立つやうに成りました」といい、さらに「三河を歩いたのは早川さんが第一で怪しまれる程歩き廻つて居られます。その次には私が歩いて居ります」と言うのである。

「その次には私が歩いて居ります」というもの言いからは、この地域の採訪に関する折口のある種の自信を感じさせるが、それは花祭りや雪祭りなどの採訪によって、まれびと論の展開や芸能史について、「漸く考へに一寸見当が立つやうに成りました」ということに裏打ちされていると考えられよう。折口は、1929（昭和4）年4月には『古代研究』民

表1 折口信夫と花祭り・雪祭り (太字が東京公演)(▲は渋谷敬三)

年月日	事項
1920年(大正9)7月19日	初めて新野を訪ね、関善兵衛・仲藤増蔵と出会い、雪祭り、花祭りを知る。松本で講演後、7月17日に出発し、大井宿(恵那市)から、岩村、横道、櫃沢、海、平谷、柳平、日吉、寺山を経て新野へ。7月20日には新野から向方、坂部。さらに水窪、勝坂、杉峰、小俣、京丸、田の口、飯山、堀の内、千頭、洗沢を経て静岡へ(7月25日)
1926年(大正15)1月	早川孝太郎と長野県下伊那郡且開村新野の雪祭り見学、愛知県北設楽郡豊根村牧ノ鳥三沢・山内の花祭り見学
1927年(昭和2)2月	静岡県周智郡水窪町(現浜松市)西浦の田楽見学
1927年(昭和2)3月	愛知県北設楽郡豊根村金越の花祭り
1928年(昭和3)1月	愛知県北設楽郡豊根村金越・上黒川などの花祭り見学、水窪町西浦の田楽見学 1月5日に早川孝太郎・今泉忠義・西角井正慶が津具村の夏目一平宅を訪ねる。ここで田口の窪田五郎と会い、8日には早川・今泉・西角井は豊根村上黒川で花祭り見学(窪田五郎、本郷町長・原田清と一緒)をし、9日に折口もここに合流し、折口が講話をする。
1928年(昭和3)10月21日	國學院大學郷土研究会の主催で愛知県北設楽郡豊根村三沢山内の花祭りを國學院大學に招いて実演
1928年(昭和4)1月	▲渋谷敬三が原田清・窪田五郎らの案内で本郷町(東栄町)から豊根村上黒川に入り、夏目一平、早川孝太郎らも加わって花祭り見学
1929年(昭和4)12月	三沢の花祭り衆の家に数日滞在(→歌集『春のことぶれ』)
1930年(昭和5)1月4日	愛知県園村(東栄町)足込の花祭り見学(渋谷敬三・折口信夫・早川孝太郎・宮本勢助・今和次郎・高橋文太郎らと)
1930年(昭和5)3月	『民俗藝術』第三卷第三号が「花祭り研究」を特集。「山の霜月舞—花祭りの解説—」発表
1930年(昭和5)4月	早川孝太郎『花祭』前編・後篇刊行
1930年(昭和5)4月13日	▲三田網町渋谷邸の新築落成披露での愛知県本郷町(東栄町)中在家の花祭りを見学(柳田國男・折口信夫・泉鏡花・金田一京助・伊波普猷ら)
1930年(昭和5)4月14・15日	國學院大學郷土研究会主催で園村足込の花祭り実演
1930年(昭和5)4月22日	國學院大學を会場に民俗藝術の会主催で、水窪町西浦所能の田楽実演
1930年(昭和5)4月30日	折口信夫の招きで雪祭りの例祭奉仕者が上京し、5月2日に日本青年館で、5月3日に郷土研究会主催で國學院大學で雪祭り実演、4日には明治神宮で公開実演を行う。
1930年(昭和5)10月	國學院大學・慶応大学学生を連れて新野の村落調査
1931年(昭和6)1月12日	豊根村山内の花祭り見学(藤井春洋・波多郁太郎らと)。前日には本郷で原田清の案内で狂言舞台、小学校で古地図、土俗品展覧会を見る。
1931年(昭和6)1月13日	新野の雪祭り見学(藤井春洋・波多郁太郎らと)
1931年(昭和6)7月	原田清らが設楽民俗研究会を組織し、雑誌『設楽』を発刊する(昭和15年12月、17号まで)
1932年(昭和7)1月6日	愛知県北設楽郡園村大入の花祭り見学(北野博美・西角井正慶・藤井春洋・波多郁太郎らと)
1932年(昭和7)1月14日	新野の雪祭り見学
1933年(昭和8)1月	新野へ
1933年(昭和8)1月	▲渋谷敬三、早川孝太郎、原田清らが下津具、新野、大河内、坂部などをまわる
1933年(昭和8)4月28日	新野へ(大場磐雄<内務省神社局嘱託>と伊豆神社郷社昇格のための調査)
1934年(昭和9)1月	▲渋谷敬三、原田清宅に滞在して中在家の花祭り見学
1935年(昭和10)1月	▲渋谷敬三、御園の花祭り、中在家の花祭りを見学
1937年(昭和12)1月13日	豊根村三沢の花祭り見学
1937年(昭和12)1月14日	新野の雪祭り見学
1940年(昭和15)2月24日	愛知県田口町(鳳来寺町)田峯の田楽見学(藤井春洋・加藤守雄・池田弥三郎らと) 新野の下瀬宜・伊東栄市例祭奉仕50年記念として折口の揮毫による諏訪神社参道道標の建立
1941年(昭和16)1月	豊根村金越の花祭り、愛知県北設楽郡富山村大谷の御神楽、長野県下伊那郡天龍村坂部の冬祭り見学(早川孝太郎・本田安次らと)
1949年(昭和24)1月	▲渋谷敬三、中在家の花祭り見学
1952年(昭和27)5月1日	新野・雪祭りが国の無形文化財に指定
1953年(昭和28)1月7日	岩波映画社による記録映画「雪祭り」制作の相談に新野の仲藤増蔵が訪れ、シナリオの執筆を承諾する
1953年(昭和28)1月11日	脱稿した「雪祭り」シナリオを三隅治雄に新野に持参させる。
1953年(昭和28)9月3日	死去
1953年(昭和28)11月2日	「雪祭り」が11月1日に日本青年館での芸術祭全国郷土芸能祭に出演し、2日に國學院大學で折口慰霊のための公演。
1958年(昭和33年)	伊豆神社参道に折口信夫(釋道空)の歌碑「とほき世ゆ やまにつたへし神いかり このこゑをわれきくことなかりき」建立
1960年(昭和35)10月28日	鶴ヶ岡八幡宮の招きで「雪祭り」奉納。29日に國學院大學を訪問し、関金太郎が折口の霊前に順の舞を奉納

『折口信夫全集』37(年譜)、『折口信夫手帖』(折口博士記念古代研究所)、『柏葉拾遺』(柏窓会)、『屋根裏の博物館』(横浜市歴史博物館)から作成

俗学篇第一ならびに国文学篇を出しており、この時期が学問的にもっとも充実した時代だったのである。

雪祭りや花祭りの見学・採訪はこうした時代に、折口にとっては上記のような意味をもって繰り返し行われるのである。以下、先にあげた花祭りなどへの旅に若干の説明を加えておくと、1926（大正15）年1月の翌年1927（昭和2）年2月には西浦の田楽を見学し、3月には豊根村金越に行っている。金越については、1937（昭和12）年1月・『短歌文学全集 釋迢空篇』（第一書房、全集36）の「釋迢空年譜」に自ら「三月、三州北設楽郡豊根村に花祭り」と記しているが、この時期には通常の花祭りは行われておらず、どのような内容であったのかは不明である。

1928（昭和3）年1月の花祭り見学は、5日には早川孝太郎と今泉忠義、西角井正慶が愛知県津具村の夏目一平宅を訪ね、ここで田口（設楽町）の窪田五郎と会い、さらに8日には早川・今泉・西角井は花祭りを見学するために訪れていた豊根村上黒川で窪田五郎と本郷町長であった原田清に会い、9日には折口信夫も合流して花祭りを見学するとともに、折口はここで講話を行っている。折口は「花祭り」と関連させながら、1926（大正15）年には「鬼の話」、1927（昭和2）年には「山のことぶれ」を発表しており、1928（昭和3）年時点には、すでに「花祭り」研究に関する、ある見通しをもっていたといえる。

そして、1928（昭和3）年10月21日には國學院大學講堂で豊根村三沢山内の花祭りが実演されるのである。昭和3年10月刊の『民俗藝術』第1巻第10号には、「三河の山間に残れる古舞踊『花祭り』実演 十月廿一日（日曜）午後一時より（市外渋谷町）國學院大學講堂に於て」という見出しの記事が掲載される（69頁）。同年12月刊の『民俗藝術』第1巻第12号では「民俗藝術界」の欄に「花まつりの紹介」として、実演の様子が紹介され、「実際は非常に時間を要するものだが、ほぼ四時間余に短縮し、一々の曲目に就て折口教授の興味ある解説があつた。短縮の方法は研究の余地もあり、解説も一層くはしくありたかつたが、それは望蜀であらう」「此の花祭の実際を知つてゐる我々は一様に、以前からこれを東京に紹介するの必要を思ひ、同時にその困難を云ひあつてゐたのだ。少くとも日本青年館の郷土舞踊と民謡の会に選ぶべきものではないからだ」などの論評が行われている。花祭りを実演した山内の一行は、「予定は八人の小人数で来る筈だつたが、来て見ると、二三十人もの大部隊であつた」という。

そして、國學院大學で実演を行った翌10月22日には、田植唄、稲刈唄、盆踊唄、念仏唄、花祭りの囃子をJOAK（現在のNHKラジオ）で放送している。

1929（昭和4）年1月は、折口は奥三河には行ってないようだが、この年の1月5日にはアチック・ミュージアムを主宰する財界人である渋谷敬三が、原田清、窪田五郎らに案内されて本郷から豊根村上黒川に入り、夏目一平や早川孝太郎らも加わって上黒川の花祭りを見学している。渋谷はこれ以後、1932（昭和7）年を除いて、1935（昭和10）年まで毎年奥三河の花祭りを見学に出かけており、これには多くの研究者が同行するようになるのである。1930（昭和5）年1月の、折口の園村（東栄町）足込の花祭り見学は、渋谷敬三、早川孝太郎、高橋文太郎、宮本勢助など、アチック同人らと一緒にだった。

折口信夫はこの前年の暮れに三沢の花祭り衆の家に滞在している。何が目的であったのかわからないが、花祭りを迎える前の村を訪れているのであり、ここで「雪まつり」と題

する連作を詠んでいる。折口の第二歌集である『春のことぶれ』（1930年1月）は、表紙に「花祭り」や「雪祭り」に登場する「鬼」の顔を箔押ししたもので、この鬼を「春のことぶれ」として理解していたのがわかる。



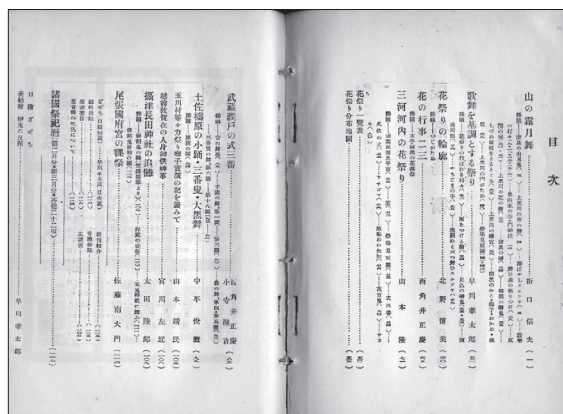
釈道空(折口信夫)
『春のことぶれ』
(1950年(昭和5)年)表紙の鬼

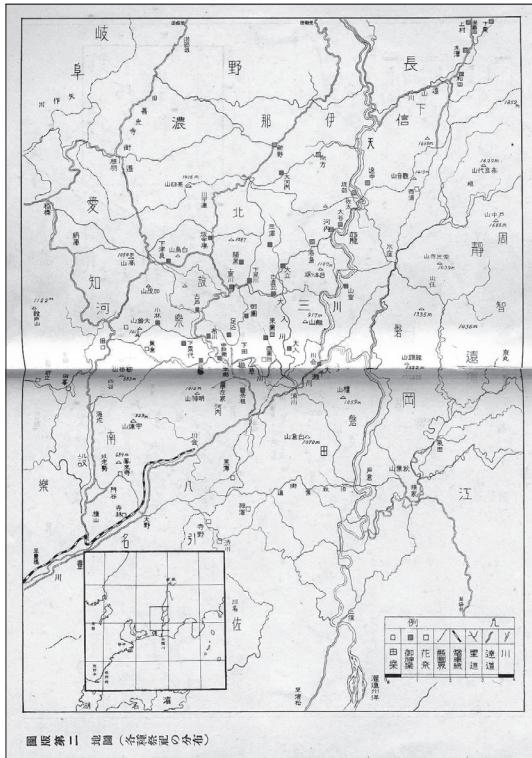
1930（昭和5）年の花祭り研究

1930（昭和5）年には、上記のような動向を受けて花祭り研究が大きく盛り上がり、同年3月刊の『民俗藝術』第3巻第3号が「花祭りの研究」を特集している。同誌の前号である第3巻第2号の「編輯後記」（北野博美執筆）には「本号は、例の三河北設楽郡の山奥に残る花祭り研究の号にする積りで、折口信夫先生からは七十枚の長編論文、早川孝太郎さんからはいろいろな写真や見取図を頂いたのだが、折口先生が今年もまた同地に出かけられ、更に資料を得て来られたので、それも頂戴したいとの欲が出来て、にわかには予定を変更することになった」「来月号はいはずと知れた『花祭り号』である」とある。

『民俗藝術』の「花祭りの研究」は早川孝太郎が描いた「榊鬼の反閨」の絵が表紙になり、折口信夫「山の霜月舞」、早川孝太郎「歌舞を基調とする祭り」、北野博美「花祭りの輪廓」、西角井正慶「花の行事二三」、山本隆「三河河内の花祭り」と、「花祭り一覧表」、「花祭り分布地図」を収録している。さらに同号の「編輯後記」（北野博美）には、國學院大學郷土研究会では、同大で4月14・15日には足込の花祭り実演、4月22日には西浦の田楽、4月月末か五月上旬には信州新野の雪祭りの実演がある筈と報じられている。

1930（昭和5）年4月刊の『民俗藝術』第3巻第4号には、早川孝太郎の著作『花祭』が柳田國男序、折口信夫跋として、300部限定版で特価予約募集が岡書院によってなされている。定価25円、特価20円で、4月10日より申込順によって配本をするとのある。そして「編輯後記」には「四月は東京にある人に取つては仕合せな月で、十四五日に國學院大學郷土研究会主催で、同大学の講堂で三河の花祭りがある。足込の人々が来てやる。十八日から三日間日本青年館で第五回郷土舞踊と民謡の会がある。十九日二十日は昼夜で、入場料は参拾銭。二十日は民俗藝術の会主催で、國學院の講堂で西浦所能の田楽がある」と予告している。前号で報じた西浦田楽の実演は主催者が変更になっているが、花祭りの実演ともども日程が確定したのである。これらに先だって、4月13日には三田網町の渋沢敬





図説 第11 祭儀 (水原清隆の調査)
早川孝太郎『花祭』上巻所収の花祭等の分布 1930(昭和5)年

三郎の新築落成披露では多くの人を招いて本郷町(東栄町)中在家の花祭りが実演され、翌14日には渋沢敬三は16ミリフィルム撮影のために再度、花祭りを演じてもらっている。

こうして奥三河の花祭りは、一気に多くの人を知るところとなるが、1930(昭和5)年8月刊の『民俗藝術』第3巻第8号には豊根村の辻紋平による「三河北設楽の村々で行はれた神楽に就いて」が掲載される。花祭りのもとになっている、所謂七日七夜の神楽についての調査報告で、前文に、これは折口の許へ送られてきた辻紋平の調査報告である旨が明記されている。辻紋平のこの原稿については、折口が昭和5年2月6日付けの手紙で依頼している。「先日は大へん御村中にお世話様になりまして殊にあなた林様には一方ならぬ御苦勞かけて申し

わけありません」で始まる長文の手紙である(全集34、書簡127番)。この文言は、1928(昭和3)年10月の國學院大學での花祭り実演に対する礼で、続いて、

さて、小生いよいよ神楽の研究を致したく考へ出しましたについて、あちこちいまだ存命中の人々にも問ひましたが、どうもわかりかねます。わかりかねてゐます処へちようど出発前に聞いて、もう聞きに参る暇もなくあきらめて帰りました。上手の屋敷の御老人とやらが、粟世の神楽を見られたとの事が耳に残つて忘れられません。それで上手老人の生きてゐられる間にあなたの手で調べておいて頂きたく、此手紙を書きました。

と手紙の趣旨を述べ、調査結果の表記の仕方、調べて欲しいことの7項目などを記している。文面のなかでは「何分研究に至急を要する処ですから、聞いてすぐその晩、書いて頂くやう願ひます」「この手紙着き次第、早速調べにかゝつて頂きたく存じます」「二伸。神楽の事、出来るだけ早く出来るだけ多く調べて、送つて下さい。御勞力は、決して無駄にはしません」と、繰り返し急いで欲しい旨を述べ、また、「何にしても山内の字の不利益になるやうな事は致しませんから」と、懇願の意も表している。

辻紋平の神楽調査は、この後すぐに行われて折口に資料が届けられたようで、1930(昭和5)年2月29日付けで折口から辻に礼状が出されている。「早速お調べ下さいまして非常に嬉しくおもひます。十分それを利用して頂けることゝ存じます」と述べ、辻から申し出のあった年中行事の調査を進めてくれるように頼み、原稿用紙を同封している。さらに礼状のなかでは「何分花祭り、神楽についての関係は早川さんの方の分が、もうよほど、活版になつてゐますので、私も早く拝見せなければ、三沢側の花についての歴史が、埋れて了つても困ると存じます」と意図を強調し、「お忙しい中、至急にお書き下さいまして、

お送り下さい。待ち入ります」、「相成るべく大急ぎで御着手下さい。それでないと間にはないことになつてしまひます」と、繰り返し依頼している（全集34、書簡128番）。

辻紋平の「三河北設楽の村々で行はれた神楽に就いて」はこうして掲載されたことがわかるが、手紙での折口の急がせぶりは、いったいどのような事情があったのであろうか。ただ単に辻紋平に確実に調査をやってもらうために、急ぐことを言い、早川の『花祭』を引き合いに出しているのだろうか、また、神楽調査を通じて地元の研究者を育てることを目的にしたのだろうか、あるいは自身の研究の中で早急に神楽の資料が欲しかったのであろうか。『民俗藝術』の花祭り特集号への執筆が差し迫っていたこともあろうが、辻の調査を急がせたのはそれだけの理由ではないように思われる。

折口は、新野では仲藤増蔵、後藤兵衛ら多くの人と深く親交を結び、その交流は生涯続くのであるが、やはり奥三河においてもこうして神楽の報文を寄せた辻紋平、山内の林準三、本郷町長の原田清らと親交を深めていたのである。1928（昭和3）年10月に國學院大學で山内の花祭り実演が実現できていることからすれば、1926（大正15）年1月に早川と初めて山内の花祭りを見学し、これによって辻紋平や林準三らとの交流が始まっていたと考えられる。

奥三河の花祭りと同時に、折口は新野の雪祭りの紹介も積極的に行っている。1930（昭和5）年5月3日には郷土研究会主催で新野の雪祭りを國學院大學で実演するが、これに先だって5月1日発行の『民俗藝術』第3巻第5号には、折口が口述して北野博美が筆耕した「信州新野の雪祭り」、中島繁男による「下伊那民俗藝術地図」「信州下伊那民俗藝術地図に添へて」が掲載されている。そして、昭和5年11月刊の『民俗藝術』第3巻第11号の「編輯後記」には、「記録と云へばもう一つ『雪祭り』があるのだが、此は先月同地へ出かけて更に精細なものをつとて来た。十二月号に纏めて出さうか、臨時号としようか、目下考慮中である。いづれにしても近く上梓出来る。かなり大部のものになる予定である」と、新野の雪祭り調査の記録のことを言っている。「先月同地へ出かけて更に精細なものをつとて来た」というのは、昭和5年10月の折口と門弟、國學院・慶応の学生による「村落調査」のことであるが、この調査記録は結果的には刊行されずに終わっている。しかし、國學院大學折口博士記念古代研究所には、「長野県下伊那郡旦開村新野 村落調査」と題した稿本ノートが残され、これには調査項目と担当者名が記されている。この稿本はすでに松本博明によって翻刻がなされている（『折口博士記念古代研究所紀要』第七輯、2004年3月）が、稿本には折口のコメントも書き込まれていて完成直前まで進んでいたことがうかがえる。調査項目は、1、経済状態、2、家屋調査、3、村落組織、4、行事伝承、5、口頭伝承、6、物的伝承の6項目とそれぞれの細目が立てられていて、雪祭りを伝える村の民俗や生活実態の全体に及んでいる。早川孝太郎の『花祭』には欠けていた、芸能を伝える村の社会・経済基盤、民俗的背景を明らかにすることが目的だったと思われるが、この調査に見る折口の民俗採訪の構想は、上記のように村落生活の総合的な把握にあったのである。民俗語彙を中心にし、それぞれについての伝承を列記していく手法とは明らかに異なり、民俗採訪の主眼は民俗誌的叙述にあったといえそうである。

民俗学や民俗芸能研究ばかりでなく、奥三河の花祭りの村々や雪祭りの新野にとっても1930（昭和5）年は重要な年であった。東京で花祭りを実演した山内、そして中在家、足

込、雪祭りを実演した新野、田楽を実演した西浦の人たちにとって、これらを演じ、伝えていくことの意味がどのように考え直されたのか、そして、実際に芸能に何かの変化があったのか、現在では知るよしもないが、演者やそれを支える人々の視線が神々や村人だけでなく、芸能を通じて外部にも向くようになったのは確かだと思われる。

こうした中で一つの大きな動きは、奥三河の人たちによって設楽民俗研究会が組織され、雑誌『設楽』の発刊が1931（昭和6）年7月から始まっていることである。これは1940（昭和15）年12月の17巻（号）まで続くのであるが、創刊号の巻頭に掲げられた原田清の「設楽の発刊について」には、

今回私達が「設楽民俗研究会」を組織して冊子『設楽』を創刊し大いに郷土研究を高調しやうとするのは、勿論今直ぐ我が郷土の振興に直接の解決策を見出す方図を与え得るものではないのです。が然しいま天下の形勢を御覧じろ、輿論はこの山村に向って何を要求してゐると見ますか。私は之に対しては農山村が生れ乍らに持つて居る筈の真実の発言を求めて居るものと観たいのです。（中略）

吾々はもっと村を知らねばならない。力強い村と村人との成長を知らねばならないのだと思ひます。（中略）

廻り遠くても手間がとれても結局は郷土の研究に第一歩を置かねば吾々の生活は良くなって行く可能性がないことになるのではないでせうか。

と、郷土研究の必要性が気高く叫ばれている。本郷町長を務める原田清の言には、花祭りの脚光に浮かれたところはなく、むしろ村人たち自身が、その内面から地域振興を目指す方法としての郷土研究を説いているのである。折口、早川、渋沢らの奥三河通いは、地域の指導者層には、しっかりとした郷土研究の気運を醸成したといえよう。

1930（昭和5）年以後も折口の花祭りや雪祭りへの関心は続き、翌1931（昭和6）年1月の花祭り・雪祭り見学は、慶応大学助手の門弟の波多郁太郎日記に日程がある（池田弥三郎『わが幻の歌びとたち』角川選書、1978年7月）。

これによれば、折口は松本の浅間温泉から名古屋に出て豊橋から本郷（東栄町）に1月11日に入り、ここで早川孝太郎と会っている。地元の原田清の出迎えを受けているようで、12日には早川も折口らと一緒に坂宇場の神楽屋敷まで行っている。折口らはここから辻紋平の案内で三沢山内に向かい、地元の林準平家の世話になりながら13日の昼まで花祭りを見学し、その後、徒歩で新野に向かっている。新野では仲藤増蔵の出迎えを受けて、14日は朝から15日の昼まで雪祭りを見学して、自動車で清崎（設楽町）に出ている。花祭りと雪祭りの見学は、13日の晩をはさんで前後一昼夜ずつ徹夜の見学であった。清崎に出たのは、1930（昭和5）年に現在の本長篠と清崎間の田口鉄道が開通していたからである。田口鉄道の全線開通は1932（昭和7）年である。

折口は、翌年の1932（昭和7）年1月にも門弟や学生を連れて花祭りの見学に出かける。現在は廃村になった園村（東栄町）大入の花祭りで、折口博士記念古代研究所に残されている大入の花祭り写真はこの時に撮影されたものである。

1926（大正15）年以降、これだけ花祭りや雪祭り、西浦田楽などに通い、それぞれの芸能を見続けたにも拘わらず、折口はその採訪記録を残さずに終わっている。現場で雪祭りを記した手帖は存在するが、これは忠実な生活記録といえるものではなく、これらの採訪

内容は、直に講演や論文に昇華されていったといえよう。

ただし、花祭りに関する論文のうち、「山の霜月舞」は、花祭りの形成について、この地域における神人や芸能者の移動と定住などと結びつけて理解しようとしており、民俗誌的な色彩をもっているといえる。伝承されている芸能を個別に切り取って検討するのではなく、これを伝える地域の文化的・社会的基盤と結びつけて捉えようという視点である。しかし、折口は沖縄探訪後に行ったような、いくつかの視点に基づく民俗誌的な叙述は、花祭り伝承地域では行っていない。

おわりに

折口信夫の花祭り研究は、以上に見てきたように新野の雪祭り研究と一体になって行われた。この2つの祭りはほぼ同じ時期に行われ、折口は奥三河と新野を新野峠を越えて行き来し、夜を徹して実修される祭りを連続して見学することもあった。花祭りと雪祭りは、それほどまでに折口の魂を揺すったのであり、両地域の村びとたちもそれを感じてか、親交を結び、東京での公演に応じている。また辻紋平らは神楽研究へと進み、原田清らは設楽民俗研究会を結成して会誌も発行するのである。

折口自身は、花祭りや雪祭りについて次の論文で取り上げ、「まれびと」論を進展させ、また芸能論の土台となる考えをまとめている。

- ・「鬼の話」講演筆記（全集3巻）1926（大正15年）
- ・「山のことぶれ」『改造』9巻1号（全集2巻）1927（昭和2年）
- ・「翁の発生」『民俗藝術』1巻1号・3号（全集2巻）1928（昭和3年）（この中の「10翁の語り」「18翁のもどき」で花祭りに触れる）
- ・「花の話」講演筆記（全集2巻）1928（昭和3年）
- ・「鸞替へ神事と山姥」『江戸文化』3巻1号（全集17巻）1928（昭和3年）
- ・「雪まつりの面」『民俗学』1巻4号（全集3巻）1929（昭和4年）
- ・「三河の山村」『民俗学』1巻2号（全集21巻）1929（昭和4年）
- ・「山の霜月舞—花祭り解説—」『民俗藝術』3巻3号（全集21巻）1930（昭和5年）
- ・「信州新野の雪祭り」『民俗藝術』3巻5号（全集21巻）1930（昭和5年）
- ・「霜及び霜月」『民俗学』2巻5号（全集17巻）1930（昭和5年）
- ・「神々と民俗」『瑞垣』16号（全集20）1950（昭和25年）

とくに大正末から1930（昭和5）年までに、立て続けに花祭りや雪祭りを論じているのがわかる。この時代は折口にとってはもっとも充実した研究生活を送っていた時でもあった。しかし、折口はその後も花祭りや雪祭りの見学を続けており、1931（昭和6）年以降の見学が折口にとってどのような意味をもったのかは、今後の課題となる。